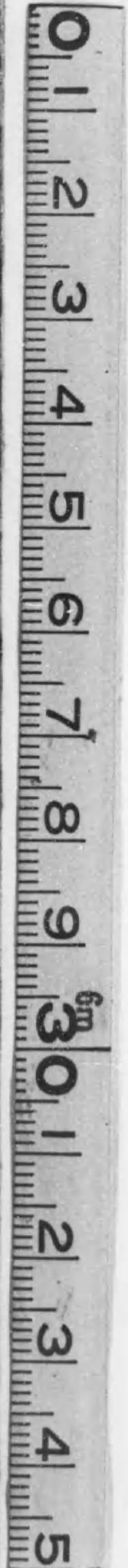




特273

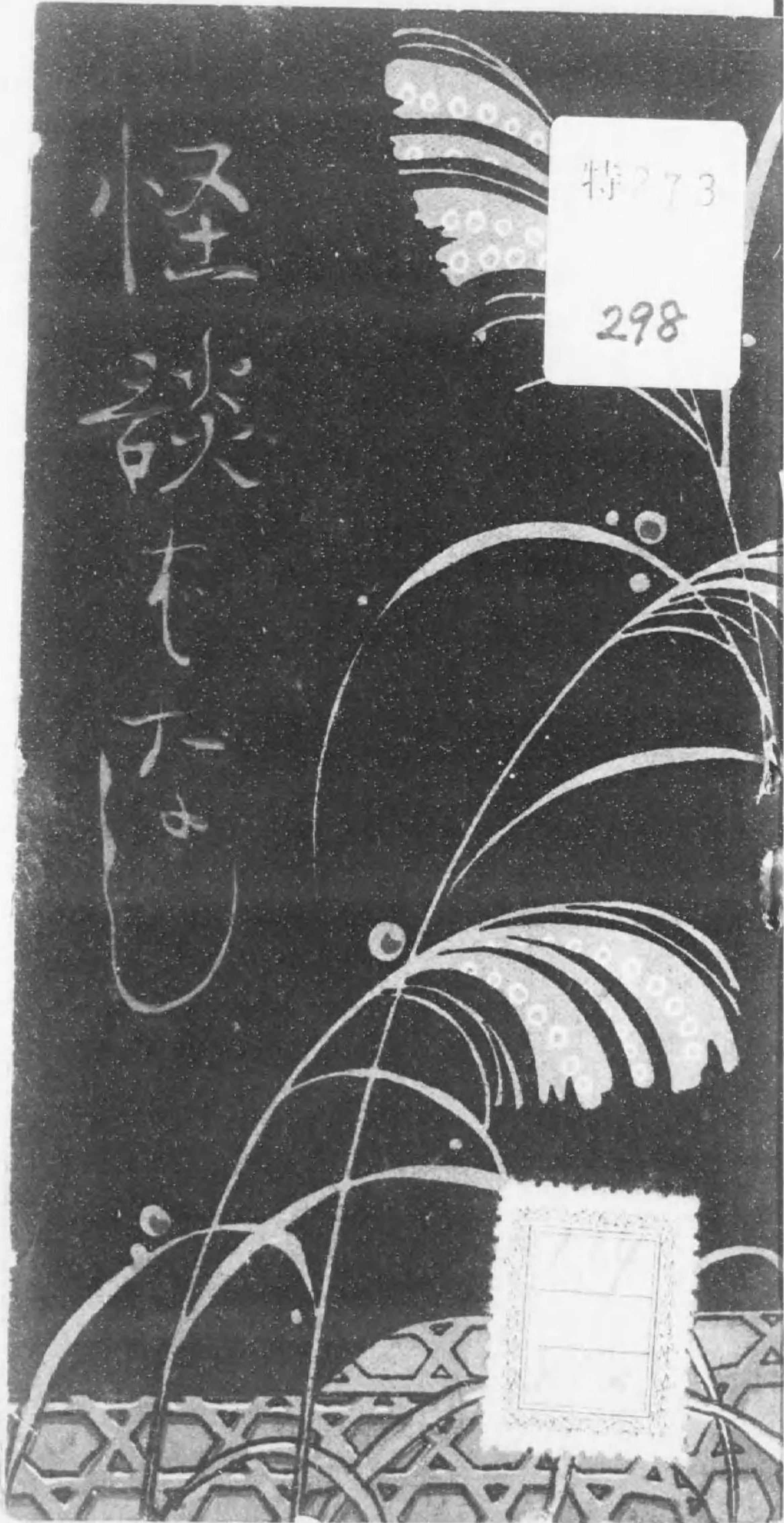
298

274
298



始





怪談七女

特273
298

[Stamp]

特273
298

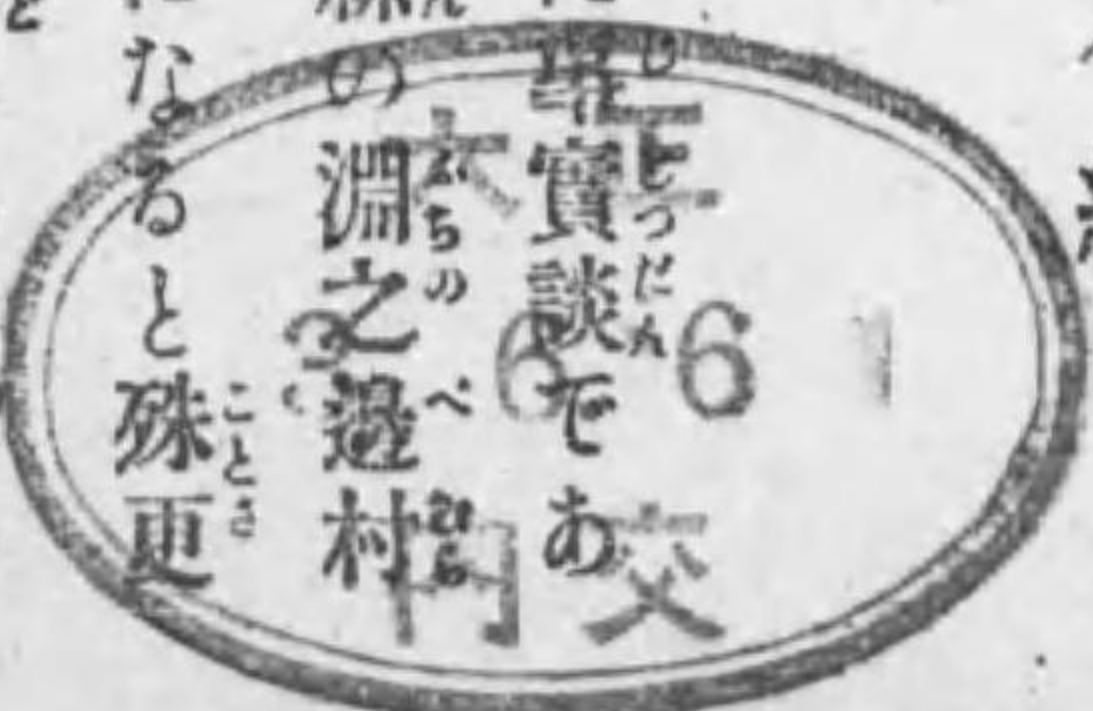
怪談 噺

變化道人編

椽の下したの怪くわい

(1) 噺 談 怪

此この噺はなしは今いまから數すうヶ年ねん以前いぜん、編へん者しやの郷きやう淵うら之邊のべ村むらに生おこつた事こと實じつ談だんであ
 ると、ます冒頭はうとう保ほ險けんを附つて説とき出だす妖えう怪くわい談だんは、神か奈な川がは縣けんの淵うら之邊のべ村むら
 の豪ごう農のうの家いへがある。其その家いへの臺だい所どころは何なんとなく陰いん氣きで夜や分ぶんにななると殊こと更さら
 ら物もの淋しみしく、家うち人のひとでさへ餘あまり夜よるは臺だい所どころへ行ゆくのを厭いやがる程ほどでした。あ
 る夜よるの事こと、妻さい君くんが何なにか止やむを得えぬ用ようがあつて臺だい所どころへ來くると、手てに携たづまへ



て屠た手燭の燈火が風の無いにフット吹き消されて、了つたので、
オヤと思ふ中、隅の方に朦朧として明瞭とは見えなかつたが、女の
姿が目映つたので、

「呀ッ……」

と消魂しく叫んで、座敷へ逃げて歸つた。それから此話を良人に話
すと、

「莫迦を言へ現代そんな詰らぬ事があつてたまるものか……」
と一向とりあつて呉れぬので其まゝに日を過す中、下女も娘も見
たと言出したので、主人も少しく變に思ひ出したもの、此女の幽霊

の姿如何云ふ譯か男には一向姿を見せない、見るものは女に限られ
て居るので、或僧侶に此話をすると、

「それは多分何か深き因縁があるに違ひない何しろ其幽霊の姿を現
はす處の、椽の下を掘つて査めては如何だ……」

と言はれて主人は物は試めしと、揚板を外し床下の土を掘りはじめ
ると、怪しや深くも掘下げぬ中ガチリと鋏先に觸る物があつた何物
ならんと、猶も掘撥して見ると、大分に古びた墓石が現はれた。借
てはと熱くく其墓石を査べると、上部の方は大抵缺損て、誰人の
墓とも判らぬけれど「信女」とあるだけは漸く讀むことが出来た。

其墓石を鄭重なる供養して、寺へ納めてから以來は、バツタリと幽霊は姿を現はさなくなつた。

執念の姿

當時第二流の俳優で其名は爰に隠すとして假りに澤村何十郎として置く、此の何十郎が十年程以前地方巡業の際、静岡縣沼津の某旅館に暫く逗留中、开處の娘と何日しか情交あつて水もらさじの語らひはしたものの、何十郎何日まで、沼津に居る譯にゆ。沼津より其の身、翌日出立と云ふ其夜、泣て分れを惜む娘を辛くも得心させ。

翌朝の一番汽車で爰を出發して、旅から旅と稼ぎ廻り、滿一年ばかりの間は全くの旅鴉で、元より浮氣の稼業、女に不自由もせねば、沼津の娘の事などは悉皆と忘れて居た。處が一方沼津の娘の方では何十郎の因果の胤を身に胎し、父や母から非常な譴責を受け死ぬの生ると大騒ぎをやつて兎に角一旦は納まつたもの、納まらぬは腹の胎子、九月目で女の子を生みは産んだもの、珍らしい難産で其子は三日目で、産婦は十日程経てから、終ひにかへらぬ人となつて了つた。何十郎は斯る事のあつたなぞは夢にも知らず、相變らず暢氣に三州の岡崎へ興行に来て宿屋へ着くと、宿の女中が、何十郎

の傍に二枚の座蒲團を出したので、

「姐さん私ば今夜は一人だよ」

と注意をすると、館婢は不審らしく、

「アラッお傍にお伴れ様が居らつしやるじやありませんか」

と言はれて、何十郎もギョツとして思はず冷水を頭から浴せられた様な氣持になつた、併し其晩はそれで何事もなく済んで了つたが其後ち久振にて東京へ舞戻つて、辛抱したのでグツと人氣も出て、師匠の盡力で一流の舞臺も踏めるやふになつたので、或人の周旋で女房を迎へた。

或日若夫婦がうち揃つて穴守へ散歩に行つた歸路さる料理店へ飯を食ひに行くと、不思議や樓婢は三人分の座蒲團を持つて來たので、何十郎は、岡崎の旅舎の事もあるので、オヤ再かと慄とはしたもの、女房の前もある事として、巧く其場は冗談にまぎらしお茶をにごして了つた。

借て料理屋を立出でると、モ一夜は大分更けて淋しい横町へかゝつて來た時は、何十郎は何とも云へぬ厭な氣持になつて來たが強ゐて勇氣を生し、女房の手をとつて急ぎ我家の前まで來た、スルト再た不思議が生つた。

我家の前へ来た途端、其處には誰も居らぬのに、スーッと格子戸が開いたのには、流石の何十郎も震へあがつた、併し幸ひのことには女房の方は何にも氣がつかぬらしかったので何十郎素知らぬ顔して内に這入つたが、別段、其夜も幽霊の姿も現れず何事もなかつたがそれから三四日過ぎて、新聞を讀んで居ると、女房が傍へ来て、「大層面白想な、小説ですね」と言ひながら、其新聞小説の美人の挿畫が一人の姪婦が七轉八倒の苦悶をして居る繪に變つて見へたので、二人は、「呀ッ……」

と呼んで氣を失つたので家人に扶けられて漸く蘇生してからそのうちと云ふものは、暫く執念に惱まされたが、某高僧の懇な供養をして貰つてから、今では忘れた様に何の祟りもなく、無事に社會に知られた名優となつて居る。

劇場の怪異

俳優の怪異談を述べたから、次は劇場の怪異を紹介します。偕て此劇場は今改築され、座名も變つて居りますから、本名でお嘯を致しても差支へはないのですが、少々考へる處あつて假名でお嘯をい

たします處は上州の高崎で、味守座と云ふ劇場、此座は芝居者で知らぬ者のない程名高い化物座で、ある時、三津五郎勘彌の一座で興行した事がありました其時、座附の樂屋番の老人から、一座の俳優の某が聞て震へあがつたお咄しの二つ三つを記して見ませふ。

第一此味守座は一切、妖怪や幽霊の出る狂言は演る事のならぬ規定がある。倘し此規定を無理に背むきて演つたら、大變、必ず異變が生る。

第二舞臺下（俗に奈落）を使ふことを禁め、廻り舞臺を廻すには、舞臺の上で動す事になつて居る。此理由は久しき以前旅役者の一座からだとの事。

で十段目を演して、光秀に扮した座頭が、奈落へ落ちて其儘怎うしても死骸が発見なかつたそれからは、奈落へ這入ると屹度異變が生るからだとの事。

第三觀客の便所は夜分遅く（閉場てから）は使用せぬ事、此理由は或年女の旅役者が此座で興行し一行悉く、座へ宿泊した或夜半一人の女役者が用を便しに廁へ行つて、恐ろしい姿の幽霊を見たとの事。

第四樂舎の二階の真中の部屋は誰人も宿泊は禁じられてある強ゐて泊ると即座に祟がある。

第五囃子方の下座の後部に、大道具用の鏡臺が置いてあつて、其鏡臺は如何なる事があつても取除ける事を禁られて居る、これも強ゐて取除れば、必ず不思議がある。

幽 霊 室

幽霊室と題しても決して、幽霊の居間として何も設けた次第ではない、此室は、大阪の某大病院内にある、死體室の事で、何でそれが幽霊室と稱へるか、これがお話の材であります。元來言ふまでもなく、病院に陽氣な筈はないが、就中、此病院は陰氣な構造、夜氣沈

々と蕭々雨でも降る晩なぞ、苦し氣な病人の呻吟の聲があちらでもこちらでもするのを、聞かせられては、幾干耳馴れて居ても好氣持な筈はなく、又死人でもあつた晩は、白い棺桶が二も三つも廊下を通ることなぞがあるので、長年此病院に勤めて居た小使の某が、熟々厭になる事がある。併しそれは尋常の厭なことで、或時こんな變つた恐ろしい目に會つたと、顔の色を變へての事實談がある。ベイント塗の二階建の病室の下にある中庭の直ぐ傍、薄暗い廊下があつて、开處を二三間行くと小使部室、开處から、直ぐ眞向に患者の死體を引取人のあるまで入れて置たり、又は解剖に供するまで、

假りに死體を納めて置く部室がある。
 ある冬のかゝりで、淋しい夜の事であつた、サラ／＼と音を立て、
 窓の硝子に觸る、木枯の風に拂ひ落されて飛散る木の葉の音が、氣
 になつて、ろく／＼と横になつては居るものゝ眠る事ができなかつ
 た、スルト枕頭にある電鈴のひびきがしたので、我破と刎ね起きた
 のは外でもない、此小使部室には、各號の室から、呼鈴の電線が引
 かれてある。何處の室で鳴しても、枕頭の番號の記してある札が掛
 けてあるため、バツタリ其札が電氣仕掛で引繰り返つて居るから、
 一目見れば、何番何號の部室で呼んだと云ふのが判るから直ぐ駈け

て用命を聞に行くのだ。處が、今、鳴り響く電鈴は、不思議／＼、
 人氣のない否人氣はあつても、生きた人間の居らぬ、死體室で呼ん
 で居るのだ。思はず、蒲團を頭から被つて其夜はとう／＼睡らなかつ
 った、偕て翌る晩はと云ふに何事もなかつたが其後ちも斯な氣味の
 悪い事は屢々あつたので、終には死體室と言はず幽靈室と呼ぶやふ
 になつた。

怪

物

次は五十年許り前の奇談なるが武藏國都築と云ふ郡がある村の若者

等夜遊びが流行して其頃は今の高島町の盛んな時で此の高島町で遊
 び俗に宵歸りとして十時に妓樓を出で、丁度春の事で月の朧を幸ひに
 二人連れでぶら／＼咄しながら來ると長蔦と云ふ所まで來ると向ふ
 より來る美人が朧の月に衣服の模様から下駄に至るまで見しに此の
 在所なぞに見し事のなき美人に何となく襟元寒くスレ違ひて十間程
 隔たつた頃ヒヨイと後ろを振り向けば美人も同じく此方を見てヒ、
 と笑ひし其の顔の凄さに一目散に逃げ歸りて其の話しをなしたれば
 流行の夜遊びも自然となくなつた。

落雷

文化年中の事で大阪在に權藏と云ふ農夫あり家も左ほど貧しからぬ
 が落雷があるときは必ず權藏の家へ落ちる、それゆゑに權藏も餘り
 度々なる故へ其の家に崇りなどあるならんと十町餘隔つた處へ家を
 新築なして家移りを爲したるに其の夜の事俄に天掻き曇り雷鳴大に
 轟き又もや權藏の家に落雷して火災にかゝり其の際權藏は火災を防
 がんとて怪我をなしたるが元にて終に死したりと。

辨天の高下駄

是れは東京深川に冬木の辨天と云ふ辨財天がある此堂に高下駄が棚に上つて居る其の高下駄が日々にへつて仕舞ふそうすると又堂守が毎年此の棚へ下駄を新調するが其のいはれは辨財天が夜なく出で、其の近傍を徘徊して火災又は悪疫の流行を除けさせ給ふとか今も昔しに變らすとの事なり奇談と云ふべし。

饅頭の奇談

明治初年の話なるが日本橋の某家に長男辰造八歳長女なみ五歳の二子を殘して母歿死しが程なくお銀と云ふ繼母來りしが此のお銀は心良からぬ人にて辰造を惡み三食の外は斷じて食物をあたへぬのみか意地わるく育つる故へ何んとなく卑しく身體も常ならず終に病體となり床に就き居りし時、親戚の者死して四十九日になり饅頭を配り來るを辰造は是れを欲すれど與へず病は日々重りて死しぬ親類縁者集り來りて其の不幸を悲み居ると辰造は突然立つて眼を睜りければ皆の衆同音に辰造如何にと問へば辰造答へて言ふ様「饅頭食ひたし」と答へける故人る走らせ饅頭を買ひ求めて辰造に與へければ三

個を食して息は絶へたりと。

七不思議

甲斐國の人より聞し儘に七不思議を記せば皿堀と云ふ堀にて獲れる鯉は皆々片眼なると柿沼と云ふ沼にて獲れる鯰は耳を生じ居ると淺間山と云ふ山へ夜に入りて登れば砧の音絶る時なく聞ゆると三浦の地藏堂と云ふ地藏堂に入れば月夜にても雨の降る音絶る時なく聞ゆると龍念寺と云ふ寺の門前に至れば讀經の聲絶ゆる事なしと蓮根の穴は必ず九つと定り居ると土用中と雖へども蚊一疋居らぬ村が一村

あるとで當國七不思議なり。

乳榎

上總流山在に乳榎と里人の稱へる大なる一本の榎がある其の榎の根元より三尺計り上より乳首に似たる瘤が二つ下つて居つて其の先から水の如き液が四六時中雨垂の様に落ちて居る其の液は婦人が乳の病を煩ふ時などこれをつくれればいかなる難症でも治せざる事なしと

枯れ櫻

「どの枝で首くもろうか花の山」とは故人の俳句なるが茲に京都市に奈良屋某と云ふ呉服商ありけるが番頭幸吉と云ふ者フト祇園新地の刈藻と云ふ遊女に迷ひ主家の金圓を費消したる爲め解雇されたるが刈藻とは兼ねて夫婦約束をなしたる中ゆる登樓して相談すれば遊女の常として金の工面に盡きたる幸吉に用なしと跳附けられたるを意恨に思ひ其の夜は体よく歸り翌晩短刀を何處にてか買ひ求め無理情死を遂げん心にて登樓すれば反つて此の事を遣手女に曉られ登樓を断られければ行く所もなく嵐山の方へ足を向けしが頃は彌生の花盛り幸吉思ふ様「刈藻には振られせめては櫻の枝に首縊らん」とや思

ひけん今を盛りと咲競ひたる櫻に首縊りたり此の櫻翌年より花咲かず終に枯れぬ。

奇

妙

是れは四年前の話して横濱の油商で出羽屋と云ふ人の話したが出羽屋の主人は關谷戸の出生で兩親を故郷へ置いて横濱で油店を出したが中々繁昌をして居る丁度十月の事で夕刻は油屋の店は多忙時で小僧を相手に頻りに油を斗つて居ると何所も夕景は小供の騒ぐものであるから又小供が例の悪口かと聞いて居ると「ヤー人玉く、ヤー

油屋の二階へ這入つた」と云ふたが氣にも止ない其の内容もスイたから夕飯をして居ると郵便が來たから開封して止むと父が病氣にかゝつたから來て呉れとの文意だから夫婦で相談をして居ると「チ、シンダ」の電報が來たので即刻關屋戸へ行て葬式を済したが小供が人玉が油屋の二階へ這入つたと云つてたが不思議な事だと物語つた

夫 婦 栗

武藏國西多摩郡青梅任に夫婦栗と稱へる栗は必ず二つ宛クツ、キ實るなり里人の言に依れば元祿の頃の事なりしが何處の何者なるかは

知らねど服装卑しからぬ若き男女が此處に情死を遂げたるを村長の情にて小さき塚を建て、栗の芽生を植へ置きしが栗は次第に生長して何時よりか斯く實るに必ず二つなる故へ夫婦栗くと稱るなりと

化 鳥

信州松本を距る事三里在に妙蓮寺と云ふ寺院あり數羽の鶏を養ひ置き又住職が鶯を非常に愛して居りしが或る日住職の居間の庭に時ならぬ鶯の鳴音がする故へ障子を細目に開ひて見たれど鶯は來らず又來る時候にもあらず扱ては我が愛する鶯が籠中より出でしには非

ざるかと疑ひ籠中を見れば鶯は籠中に確に居る故へ不思議な事と座して考へ居れば又一聲鶯の鳴音いよく不思議と此度は息を殺して障子の穴より庭の方を見張りて居れば數羽養ひ置きし鶏の一羽が鶯の鳴音を真似たりとは奇談といふべし。

龍

體

萬延の頃の奇談なるが富田と云ふ豪農ありて夫婦の中に子なきを憂ひ下野國真間の辨財天へ三七日の祈願を爲したるに満願の夕べ賽銭箱の前に近所に見馴れぬ年若き美人頻りに禮拜なして居りたり傍に

富田と云ふ人も同じく禮拜し居る内美人の姿は雲か霞の如く淡く龍體となりて消へ失せたりしが其の月より懷妊して女子を産たりと。

蝶の報らせ

是は本年七十餘歳になる、もと女と云ふ老人の事實談を記せば其の老女が三十歳の七月の事で幼少の頃より寺子屋友達にお清とて神田お玉ヶ池の質屋の娘で此の娘とは如何なる縁にや互に嫁し身なれど音信の絶る事なく姉妹にも稀なる仲なるが、此の清女が肺病に罹り危篤の由を聞き故日々見舞けるに或の日お清は不治の病を嘆じしが

其夕刻にもよ女行燈の灯を點せば數十の白蝶行燈を廻り終に灯を消したる故へ再び灯を點せば數十の白蝶蔭だにも見へすもよ女は不思議の念晴れざる内に清女の訃音を聞きたりと。

釜

鳴

大正の今日こんな事を云ふと笑ふ人もあるが伊勢の古市に菊仙と云ふ醸造家があつたが此處の主人は元は飴菓子なぞを賣つて其日を暮つて居たがある日の朝釜が非常に鳴動したが釜の鳴るは一身に吉凶があるを聞いて居れど今日の處では是れより悪くなり様がないと云

つて居ると此菊仙の正直を知つても居、且は醸造に心掛けのある人故へ是非雇ひたいと云ふ人の來りければ菊仙も心良く承知をし實は今朝釜鳴が致して只今の御話し私しの出世の索と存じて御受けをいたしますといひしが果せるかな七年の後に一つの醸造家となりしと云ふ。

釜の蓋を取るな

是れは小田原の漁夫の話したが鯛助と云ふ漁夫があつて妻をおりんと云ふが未だ夫婦とも若いから老連の漁夫が來ておりんと云ふ様、

お前方まへがたに今更いまさら云いふではないか船乗ふねのりりの鼻かみは飯いを炊たき掛かけて釜かまの蓋ふたを取とるなと常つねに云いつたが或ある日の事ことおりんが水加減みづかへんを間違まちがへたと見みへて火ひを引ひく事ことが出来できないからついで此この蓋ふたを取とつた其その日ひ鯛助たひすけが歸かへらぬを心配しんぱいして居ゐると大海嵐おほいけを逢あつて鯛助たひすけは行衛ゆくゑ不明ふみょうとなりたりと。

狐狸こりの仕業しわざ

四十年前ねんぜんの事こととか下總國しもふのくに八幡やわたの祭まつりを見物けんぶつに行いきし八藏やうざうと云いふ人の話はなしを聞きし儘ままに記しるせば八幡やわたの祭まつりを見物けんぶつして自宅じたくへ三里りの夜道よみちを辿たどり歸かへる途とちう中に墓所はかしよが丁度ちやうど二丁程ちやうほどある此處こゝへ差さし掛かると大だいの男をとこが前向まへむかふか

ら徐々しづかと歩あゆみ來くる故ゆか此方こゝらは早はやく行いき過すぎんと急いそぎ足あしになり間近まぢかく寄よると彼かの大男おほをとこは猶々なまよく仁王にわうの如ごとき大手おほでを廣ひろげて遮おほぎり止とめるを何なにを爲なるか怒いかりながら駈かけ抜ぬけんと其その手ての下したへ首くびを入いるゝや否いなズデン倒たふと投なげられたる迄までは知しれど後あとは知しらず、僥倖さいはひと通とほり掛かりの五人連にんづれの人達ひとたちに介抱かいほうされて氣きが附ついたが今いまに其その事ことを思おもふと粟立もぞつとする程ほど恐おそろしかりしと。

鳴居なぐの生首なま

或年あるとしの夏なつなりし蒸むせし殺ころさるゝが如ごとき暑あつき夜新宿よしんじゆくの或裏長家あるうらながやの事こととて

戸を明けたるまゝ寢に就きしに稍更けたるころ非常に胸ぐるしきよ
 り不斗眼を開いて見ると鴨居の所に飯櫃大の生々しき青首ありてゲ
 タ／＼と笑ふ其氣味悪るさ然れども其人氣丈なれば鐵拳を以て是れ
 を打たんとすれども手足利かず友を起さんにも口は利けず力あまり
 て列んで寢て居たる友の脇腹を打ちしが友も其翌夜之を見たりとて
 早速引越せしが此れを聞きたる老人の言によれば此近所は狸の巢に
 て多分餌をあさる爲めに斯る惡戯をなせしならんと云ふ。

蜻蛉合戦

明治三十五年の八月の事に出雲國安來港を距る南へ三里の所に熊野
 神社と稱へ素盞男尊を祀れるとか此の熊野神社の裏は大なる原野で
 あるが不思議なるかな數萬の蜻蛉が南軍北軍とでも申すやう二手に
 分れ午前八時頃より四時間ほど挑み合ひしが北軍と思ふべき方は敗
 軍となり散り／＼バラ／＼となりたれど南軍と思ふべき蜻蛉の方は
 列を正して凱歌でも唱へたるか否々尾を振りつゝ退散したり。

蝶合戦

蜻蛉合戦の次は蝶合戦とは不思議な話したが是れは明治三十八年八

月十五日午前五時頃より七時頃までの間しかも東京市中白蝶の舞はぬ所は殆んどない位のだが中就て戰場とも云ふべきは淺草の雷門にて挑み合ふ様は白雪の降るに髻髻たり卍の如く巴の如く負傷したるは地上に落ち死するもあれば再び舞ひ立つもあり日露戦争中の事として市中の人の目を引たり。

牡丹餅

六十年計り前に仙臺の在に悪狐が出ると言ふので夜に入ると餘り人通りが無い丁度十二月の事とか在の物持の主人が福村と云ふ所を通

行すると何か下駄の先にあたりたる物がある何品であるかと提灯の火で見れば大きな重箱が包んである餘り不思議な落し物なるに心附き扱ては此の頃の狐の話しでは無さかと人は兎角好奇心にかられ安い者で狐が何様な工風をするかと重箱の蓋を取つて見れで馬糞でもなく蚯蚓でもなく真正の牡丹餅に相違ないが餘り不思議な落し物だと思つて家路へ歸らんとすれど幾程歩みても家へ歸る事能はず同じ様な道のみ通る心地する内に東雲の頃となりて初めて人心づき家に歸りてこの話をなしたるに夫れは必ず馬糞を食ひし故へ誑らかされしと。

笑ひ閻魔

越後國某郡に笑ひ閻魔と稱へる閻魔大王あり頃、元和の初年の事六部が俄雨に出合ひ雨舎りなさんと閻魔堂へ入り雨の止むのを待ち居りしが一日の疲れや出でけん頻りに睡眠を催して居りしがカラ／＼と笑ふ聲に睡眠り覺して見れば外に人なし閻魔大王あるのみ扱ては夢でありしかと再び睡眠ればカラ／＼と笑ふに夢ならぬ事を曉りて思ふ様、世俗に閻魔が搯辛を嘗めたとは人の見ぬ事なれど其の御顔の凄き事なるに是は又笑ふとは猶々不思議なり我れ其の故へを問は

力石の怪事

んと沐浴祈禱して其の故へを問へば、閻魔曰く善哉々々我れ大黒の作造られべき木材でありしを閻魔に作造りしは全く佛師の心得違ひなり、我れと同木にて蛭子大黒の二体刻造らんとて蛭子は其の像で作造られしに我れ大黒になるを閻魔に作造られしとの宣言に由りて里人は笑ひ閻魔と稱へるなりと。

攝津國石原村に力石と稱へる鶏卵形の大石ありて昔し毛谷村の六助が當國へ來りし時に力だめしになしたる石とも云ふが此の石が夜の

中に隣り村へ持ち行きあるに村の者ども力を協せてよろ／＼元の所へ置けば又其の夜の内に半道を離れる稻荷山と稱へる小高き山の上へ置きあるに益々其の不思議を呼へ居る内稻荷山へ行きてより石の形狐の座したる様に化したると云ふ。

闇夜の怪

大和國郡山在にあつた事で余が其の事實を見し人からの話しを記せば郡山から三里半在に住む内藤勘兵衛と云ふ人が現今の夜の十二時頃村の庚申塚の前を通行せんと爲ると地上二寸計りの處を三尺程闇

夜を破つて五色の細き糸を引きければ通路も出来ず唯其處に仁王立になつて此の怪事を見て居ると其の三尺計りの五色の糸が消へると共に消へた糸より山形に五色の糸が顯はれたから益々不思議と見て居る内に時計五分間位にして其糸消へると共に消へたる糸より更に三角形の糸が顯はれたから眼を離さず見て居る内に又五分間計にして其の糸消へると共に又元の糸が顯はれる末は五分間か一分間一分間が時なしに三角形の糸となつたから側へ近寄るも何となくキビ悪るければ此の光景を見て居る内に夏の夜の明け易く東雲次ぐる頃となれば五色の糸は色醒めたる如く順次と消へぬ、勘兵衛は其三角

形の跡をよく見れば三尺餘の蛇と蛙と蜒の三虫悉く油汗を流して疲れ居たりしに水なぞ注けたれど竟に三虫とも死しぬ。

蠟燭の火

昔しは此類の話は澤山あるが友人某が東京近在落合に居つた時の事で一寸夜に入りて出掛るにも近頃の様には點燈がないから暗の夜は必ず提灯を燈けて行くと其の提灯が非常に重くなるとキツト蠟燭を盗られる先方へ行つて無心を云つて蠟燭を貰つて來る又同じ所で同じ様な始末なりしと。

大入道

享保の頃とかや相模の片鄙山根村と云ふあり此の村にありし怪事を記せば元吉と呼ぶ農家には多くの雇人をつかふ者なるが農家の雪隠は家より一寸離れたる所にありて此の雪隠に入れば出づる時に戸の放かぬ事もあれば雨の降らぬ夜に家根に雨の降る音したりする故へ誰れも此の雪隠へ行くを忌む機になりしが或の夜の事お仙と云ふ下婢此の雪隠へ入らんとすると引けども引けども戸の開かぬ故へ兩手を掛けて開けたれば中よりニ、ウと大入道の出でたるに驚きて氣を

ぞ失ひたりと云ふが或る其の頃の人の話しに依れば狐狸の業なりとも云ふ。

一つ目小僧

逆井と云へば本所一つ目より三里を隔つた所で此の逆井も今は汽車が出来てからスツカリ開けたが幕府時分には小松川へ鶴の御成りでもなければ餘り人の行かぬ土地だが小松川に百姓多七と云ふ男がある村の庄屋様が此の多七に江戸日本橋まで急用を頼んだが最う八刻(今の三時)だから用事を済して戻りは夜の餘程更けて殊に十一月今

欠

と一人の若者が糺ねると、熊藏は悄然として、

「ナニ誰でもねへんだよ」

「でも誰か来た様じやねへかそれに何か品物まで持つて来たじやねへか、何だつておまへは隠すのだ」

「そう云はれて見ると隠しても居られねへ」實は去年の秋、家を出た娘のおはまが来たのだ」

「それじや何故……家へ入れてやらねえのだ」

「入れてやりたくも入れてやる事は能ねえだ」

「それは又た、如何云ふ譯だアね」

欠

「娘のおはまは、不憫な事をしたアよ、今年の夏、道中で悪い病痾に罹つておつ死んで了つたア」

「莫迦を言ねへもんだ、死んだ者が何で來ることがあんべい」

「それがよ、人の一念は恐ろしいもんだ、乃公が、娘の死んだ事知んねえもんだから、おはまが、幽霊になつて、冥府から知らせに來たア」

「莫迦な事を言ねへもんだ、何でそんな事が眞個にできるもんか」

「一概に、人の咄を貶なすでねえだ、確かな證據があるだよ」

「何だつて、幽霊の來た證據がある、サア面白へ事になつた、見し

て貰ふべい」

と一同の若者は、與あることに思つて、熊藏の前へ詰め寄つた。

「これを見て下つさへ」

と、若者の面の前へ投げ出したのは、去年の秋娘のおはまが、村を出る時、確に身に着けて出た、見覺へのある、西國巡禮の白衣と笈であつた、此品を見ては、流石の若者等も、何となく薄氣味わるくなつて、

「一体全体此品が怎うして、おめへの手に這入たのだ」

「それがさ、娘のおはまが、これ〜云々の譯で死んで了つた、今

は用なき、此品々、筐の意志で持つて來たと、乃公の手に渡すと、そのまゝ、搔き消す如くに、姿は見えなくなつたのよ」と語つた。

山中の怪

夜に入つてから越前の國三國と云ふ處の濱邊に住む、生魚の商人で金七と云ふ男が、雇人を伴れて、峠越へをして、生魚を賣に出掛けた、スルト深い檜林の中を通り抜けると、ヒヨツクリ、开處に一人の女がイんで居るので、ヲヤ今頃、不思議だこんな淋しい山の中に

と、思ひながら、漸々、近づいて其婦人の傍へ寄つて、顔を見ると紛ふかたなき、金七の女房のお作であつた。

「お作じやねえか、今頃何處へ行くだア」と尋ねますれば、お作は、

「ア、少しべ用があつて、おめへ様迎ひに來たア」

と何氣なく、答へては居るが、良人の顔は少しも見ないで、兩眼を異様に光らして、魚の這入つて居る籠の方を屹と目をつけ、鼻をビコ〜と蠢めかして居る様子が、何となく怪しかつたが後で查べて見るとそれは籠の中の魚をとり來た魔物であつた。

大正三年六月一日印刷
大正三年六月五日發行

定價金十錢

不許
複製

編輯兼
發行者
高橋友太

印刷者
菅井十一郎

印刷所
東京市神田區松住町五番地
礎文社

發行所
東京市日本橋區若松町四番地
春江堂書店

電話浪花四八六二
振替東京一〇六八



終

